博物館だより

平成31・令和元（2019）年度の活動

令和２（2020）．８
第　25　号

新潟市北区郷土博物館
〒950-3322
新潟市北区嘉山3452番地
ＴＥＬ 025-386-1081
ＦＡＸ 025-388-6290
museum.n@city.niigata.lg.jp

所蔵作品展「人間はどこにいる？」
（令和元年６月１日～７月15日）展示作品

作品紹介　長沢　明（1967年、北蒲原郡豊栄町（現新潟市）生まれ）
《鳥に舟》 1999年、岩絵具、箔、土、和紙、綿布、木、 162.0×230.0cm
平成12（2000）年度購入

長沢明は、伝統的な「日本画」の画材に加え、土や木、鉄などの自然の素材、さらには古い既成物をも作品に取り込み、象徴性や具象的なイメージを喚起する作品を発表。日本画と現代美術の両分野から注目を集めました。

1997年から98年にかけて英国に滞在した長沢は、大英博物館の厖大な本のコレクションが放つ物質的な存在力に圧倒されます。そこに時間と知の堆積を直感した長沢は、帰国後に、古書を使ったインスタレーションやオブジェを発表し、表現やテーマの幅を広げていきました。

絵というよりも物質そのもののような絵画《鳥に舟》は、英国体験直後に制作された１点です。まるで悠久の時を旅したかのように錆びついた巨大な舟は、人類の文明の歴史を象徴する存在として、画面のほぼ全体を占めています。この舟に堆積する途方もない時間に対し、小鳥＝人間は、自らの存在のはかなさにたじろいでいるかに見えます。しかしこの舟は、威圧的な冷たい鉄の塊ではなく、生命を抱え込むあたたかな大地のようにも感じられます。それは、直線と曲線の簡潔な造形と、空間との巧妙なバランス、そしてマティエールの工夫等によって、この圧倒的な静的世界に、わずかな動感と生のぬくもりとが与えられているからでしょう。ともすると大きな船壁＝大地は、「表現すること」を抑制し観念的な作品制作を展開してきた長沢が、再び向き合った新鮮な画面なのかもしれません。画中の小鳥は、そこにためらいつつも描き出そうとする長沢明自身のようにも見えます。

この２年後に制作された《鳥と舟》では、舟の形態がダイナミックな動勢を獲得し、鳥は、大きく翼を広げた形象と箔の効果によって、陽光を浴びて飛翔する姿に変貌します。長沢明は、この後、堰（せき）を切ったようにためらいなく生命の躍動を描き始めるのです。　（神田直子）

＊本作品は、「長沢明展　オワリノナイフーケイ」（主催：横須賀美術館・新潟市美術館・読売新聞社・美術館連絡協議会、2020.２～６）に出品。
５/12～６/７までの期間、新潟市美術館で展示されました。